
Volare ala

sora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Volare ala

【Nコード】

N3838Z

【作者名】

sora

【あらすじ】

地上を見下ろし、裁決を下す天界。

天界の王族、「墮天族第1格―墮王―第3子 次期身上王妃」の身分に生まれた亜優。

墮王の娘でありながら白い翼を持つ亜優と、兄、暹はある日自分達と天界に纏わる重大な「秘密」を知ってしまう。

天界、そして愛する兄、渉を守る為に2人が選んだ道は、「秘密」

を守り通す事。

その為に涉と距離を置く事になった2人は、「scuola」に入学。

王族の身分を隠し、学生として過ごしていく中に「秘密」を守らなくて済む糸口を攫んだ2人。

果たして2人の行く末は・・・？

第1話 Ala colore

聖天。

「il santo di montagna」からやって来たとされる、白い翼を持つ天使達。

より純白の翼を好いとする。

堕天。

「Valley Falls」からやって来たとされる、黒い翼を持つ天使達。

より漆黒の翼を好いとする。

今天界では、上記の2つの種族が共存して生きている。

2つの種族はお互いに助け合い、認め合い生きている。

これこそが天界を維持していく上で大切な事であり、また、必要不可欠な事でもある。

3

だが、私達2種族の間には越えられない1線がある。

それが、翼の色に関する見聞の違い。

.....

ここまで読んで、「天界種族に関する基本知識」を閉じる。

「普通」・・・と言うか「人並み」には、書物の内容は分かる。

でも、お兄様達を思うと・・・究極に頭が悪い。

私とお兄様達が本当に兄妹なのか疑いたくなる。

まあ私達が兄妹である事は今さら疑っても無駄な事なのだけど・・・。

行く当てもく部屋を出、廊下でぶらぶらしていると、

「亜優。」

「暹お兄様！」

噂をすれば……だ。

暹お兄様。

軽く日焼けした肌に、悪戯っ子の様な光を宿す瞳が良く似合う整った顔立ち。

黒く短い髪に、背中で揺れる白い翼……。

いかにもスポーツ少年！という様な見目とは裏腹に、以外にも気が利く優しいお兄様だ。

「兄上がお呼びだぞ。」

「はい。渉お兄様はどこに……」

いらっしやるんですか？と聞く前に、

「裏庭。」

ぶつきらぼくに教えてくれた。

暹お兄様は、本当に人の気持ちに敏感だ。

その事も手伝い、城での暹お兄様の地位は安泰。

一方の私は、「人並み」にしか働かない頭の悪さと要領の悪さで常に城中の心配を背負っている……と思う。

が、実技の方は結構出来ている……と思う。

言い忘れたが、私は王族。

「墮天族第1格―墮王―第3子 次期身上王妃」の称号を持つ、本物のお姫様。

と言っても、王族としての最低の教養しか身に付いていない墮ち零れの姫だ。

「亜優。」

少し興奮気味に声を掛けてきたのは、「墮天族第1格―墮王―第1子 次期身上墮王」渉お兄様。

ちなみに暹お兄様は、「墮天族第1格―墮王―第2子 第2次期身

上墮王」だ。

今まで物思いに耽っていた私は、少し上擦った変な声で「ひゃいつ。」と返事をした。

言うまでも無く、お兄様爆笑。

すると、傍にいた使用人が、

「涉様っ！何ですかその笑い方っ！次期墮王とも在ろうお方がっ！」と、相当お怒りの声でお兄様を一括した。

涉お兄様。

如何にも王族らしい白い肌に、知的な瞳が良く似合う整った顔立ち。少しカールしている栗色の髪に、背中で揺れる黒い翼。

暹お兄様とは少し違う雰囲気の、又別の気の効き方。

知的風に見えて、実は子供っぽい内面。

「愛されて育った末っ子」な感じのする、これ又万能選手の涉お兄様。

私達兄妹の秘密・・・に出来ていない秘密。翼の色。

本来墮天族に白い翼の者が生まれる等・・・ありえない。在っても鼠色くらいまでだ。

しかも墮王の子孫となれば、漆黒の翼が当たり前。

なのに私と暹お兄様の翼の色は・・・白い。

しかも、聖天でも滅多にいないほどの生粋の白さ・・・。

長くて黒い私の髪。

白い翼は、驚くほどに私の黒髪を起てる。

今来ている少し長めの丈のワンピースをはじめとし、私の服も白が多い。

墮天としては異例の私達を人々が咎めないのは、私達が王族だからかもしれない。

そんな思いに耽りながら、無意識にワンピースの裾を力一杯握り締めていると、

「亜優、どうした？」

使用人のお咎めから解放された涉お兄様が、目聡くそれに気が付いた。

「何でもありません。お兄様。」

美しい漆黒の翼を持つ涉お兄様。

幼い頃、どれだけお兄様が羨ましかった事が……。

それはきつと、暹お兄様も同じ。

もし涉お兄様が意地悪な人だったら、私はお兄様を羨んだだろう。

でも私は知っているから……。

涉お兄様の、影での努力を。

「亜優、聞いてくれ！遂に実験が成功したんだ！」

興奮気味な口調に戻って、お兄様が熱く語り出す。

馬鹿な私には何を言っているかさっぱり分からない事を、この人は理解しているのだろうか？

そんな事を思いつつ、お兄様の話が終わったな、と思う瞬間に口を開く。

「おめでとうございます。流石、お兄様ですね！」

「ああ！本当に！」

本当に、お世辞がよく効く人だ。

暹お兄様だところはいかない。

「申し訳ありません、お兄様。お兄様のお話を聞きたいのは山々なのですが、そろそろ家庭教師が来ます故……。」

裏庭こてを離れる口実を適に作ってお兄様に切り出すと、

「ああ、そうか。悪かったな。頑張れよ。」

あっさりとOKが出た。

「では……失礼致します。」

裏庭を離れると、渡り廊下の途中で暹お兄様と会った。

「亜優。兄上の話、分かったか？」

いきなりそう聞かれ、どう言うべきか一瞬迷ったが、

「いえ……。さっぱり。」

暹お兄様にはどんな誤魔化しも通用しない事は分かっていたので、とりあえず正直に答えた。

「だろうな。」

そう言つて軽く笑つたお兄様は、

「実は俺も分からなかった。」

と言い、また少し笑った。

「まあ、流石は兄上だよな……。」

そう言いながら、億劫そうに自分の翼を見つめるお兄様。

そんなお兄様に、

「はい……。」

慰めの言葉1つ思い付かない自分の頭の悪さに腹が立ちつつ、私も自分の翼を見つめた……。

第1話 A l a c o l o r e (後書き)

第1話、読んで下さってありがとうございます。
初公開、私のSF作品ですが如何でしたか？

今まであまり公開はしていませんでしたが、実はSFやファンタジ
ー等の作品の方が好きです。個人的に……。
ですが、やっぱり下手くそですね……。
何か再認識させられました。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
これからもお付き合い頂ければ幸いです。

第2話 第1王子

私達の祖先は昔、人間という生物を支配していた。

と言うより、「見守っていた」と言う方が正しいだろう。

罪を犯した人間には罰を与え、良い人間には褒美を与えた。

だが、人間たちの知らぬ所でこっそりと「手助け」をしていた時代は終わりを告げた。

人間達が「科学」と呼んでいた技術を発展させ、対に私達の存在を知ったのだ。

愚かな人間達は、それを「テレビ」と呼ばれる箱で仲間知らせた。この事により、王族は人間排除の命令を出さざるを得なくなった。

こんな経路が出来上がるのもごく自然な事と言っていいたいだろう。

人間を排除するのは簡単だった。

「災い」を待てば、すぐに争い自ら自滅する愚かな生物。

人間とはそういう者達だった。

そうして人間は滅びへの道を歩いて行った。

.....

「人間に関する基本知識」を閉じ、毎度の如く恒例の溜息を吐いた。興味の有る人間学でさえ、私の頭は「人並み」にしか働かない。

私達天使以外に唯一知識を持った生物だという事は分かるのだが、それ以外はさっぱり.....

何にしる私に分かるのは、人間とは翼と魔力を持たない天使のような者だという事だけだ。

「下手の横好き」だ。

何もする当てが無くいつもならこのまま廊下でぶらぶらする所だが、

今日は遅お兄様に会いたくなかったので用が無い間は外に出ない事にしていた。
遅お兄様に何故会いたくないのか・・・？それは自分が1番分かっていない。
やっぱりこの間、落ち込んでいたお兄様に声を掛けられなかった事を気にしているのかもしれない。
でも、何故かそうでは無い気がする。

私は、自分の気持ちが分からない。
そんな時、いつも助けてくれるのが涉お兄様だ。
私の気持ちを上手く掬ってくれる。
いつでも気が付いてくれる。

コンコンッ。

「亜優。入るぞー。」

そう言う声は、正しく涉お兄様のものだった。

「涉お兄様！」

そう言っただけで寝転んでいたベットから下り、お兄様の下に駆け寄る。
「遅と何かあったのか？」
いきなり本題に入る直球さも涉お兄様らしくて少し落ち着く。

この・・・傍に居て落ち着く・・・、この人と私は結婚する。
急に、いつもは意識しない事が脳裏を過ぎる。
お兄様の事、好きだ。
でもそれは、あくまで兄妹としての好き。
でも、私や涉お兄様があがった所でどうにもならない。
もう生まれる前から決まっていた結婚。
王族としての責任。

王族はその身を流れる純粋な血を守る為、身内と結婚する。

人間と違ってそう脆く無い天使は、兄妹での結婚等普通に成せる。だがやはり兄妹は兄妹。親戚は親戚。

身内同士で結婚する者等、そう多くは無い。

例外は王族。

王族は、身内同士の結婚を義務付けられている。

第1王子と第1姫の結婚等当たり前・・・むしろしない方が可笑しいし、する義務がある。

この身分で生まれたのなら、避けて通れない道。

絶対の結婚・・・。

そんな事を思っていると、

「亜優、遅と何かあったんだろ？言ってみるよ。」

お兄様が私の顔を覗き込むようにして問う。

長い時間考えすぎた所為で、お兄様を心配させてしまった・・・。

そう気が付いたのは、暫く時間が経った後だった。

「はい・・・。ですが涉お兄様には・・・。」

言えません。と続ける必要は無かった。

私と遅お兄様だけの秘密がある時は対外翼の事で、涉お兄様はその事をよく分かっている。

翼については自分は口を挟んではいけない。と、自然に壁を作ってくれる。

「悪かったな。何かあったら言えよ。」

そう言つて静かに部屋を出て行つた。

お兄様のそういう気の使い方が好き。

遅お兄様みたいに詮索してこない、放つて置いてくれる優しさが好き。

「お兄様っ！」

そんな事を思っていると、無意識の内にお兄様を呼び止めてしまつていた。

「いえ・・・何もありません。すみません。」

不意に風が吹いて、私の黒髪が首に絡みつく。

それを直していると、

「なあ、亜優。もし遅と俺なら、亜優はどっちを……」

お兄様が何かを言ったのが聞こえた。

「すみません……。今何て……」

言い掛けた私を、

「いや、大した事じゃないから。じゃあな。」

そう言って足早に去っていったお兄様は、何かを隠しているようだった……。

第2話 第1王子（後書き）

第2話、読んで下さってありがとうございます。

「これってSF？ファンタジーじゃないの？」と思われる方がいらっしやるかも知れませんが、間違いなくSFです。この後地球の未来（創造上のです）も出てきますので、読んで下さったら嬉しいです。

では……。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

これからもお付き合い頂ければ幸いです。

第3話 柵

私達は、縛られている。
王族という柵に……。

コンコンッ。

控えめで静かなノックの音。

「姫様。」

私を呼ぶその声で、大体誰の訪問かは分かる。

「野喜っ！」

野喜とは、私の直属使用人兼家庭教師。

黒淵の眼鏡の奥に、印象的な青い瞳。

髪にも金髪が混じっていて、それと対になる様な黒い翼は神々しい。

「失礼致します。」

そう言つて、野喜が部屋に入ってきた。

「姫様、いい加減授業を受けて下さい。」

呆れた様に発する声が、妙に耳に突き刺さる。

「だって……」

まだ言い終わらない内に、

「遅様の事はお気に為さらず。」

野喜が先を続ける。

「……。」

それでも私が黙っていると、

「分かりました。今日は特別です。」

そう言つて、私に1冊の本を渡す。

「人間学基本知識」。

「分かっていますよ。姫様は人間に興味が御有りでしょう?」

「……。邁には分かつちゃう？」

私が邁を名前で呼んだ。

いつもみたいに、「姫様っ！私達はもう……。」と言っかな？と思っただけど、

「……。亜優は分かり易いからな。」

そう答えた邁に、

「珍しいね。今日はいいんだ。」

何となくそう聞いてみる。

私と邁は幼馴染。

邁は使用人の立場でありながら「墮天族第2格―上貴族―第2子」に当る、高い身分を持っている。

上貴族に生まれた者は幼少時代を王族の使用人として過ごすから、私と邁が幼馴染なのはごく自然な事だ。

只、邁は最初、暹お兄様直属の使用人だった。

その邁が私直属の使用人になったのは、やっぱり翼の色が原因。

例えば……暹お兄様は、翼の色の所為で様々な事を諦めて来た。

「邁」の名前の由来は「暹」。

「すぐる」「すすむ」。

発音に漢字も似せてある名前の2人は、とても仲が良かった。

主従関係で有りながら名前で呼び合い、互いを無二に思っていた事は、城の者なら誰でも分かる事だろう。

その影響か邁は今でも、頑なに暹お兄様の事を「暹様」と呼ぶ。

私の事は「姫様」。涉お兄様の事は「涉王子」と呼ぶのに。

まあ、それも「表」の事ではあるけど……。

というのも、「裏」では今でも名前を呼び捨てにする仲だからだ。とにかく、そんな2人を引き裂いたのも翼の色だ。

ふと、思う。

もし私達が王族でなければ……。

どうなっていただろう？

以上に白い翼を持つ墮天として、世間の風評に晒されていたのだからか？

王族は、悪くない。

それは分かっているし、分からなければならぬ。

だからこそ考える。

もし私達が人間だったら？
翼を持たない人間なら、幸せになれた？

物思いに耽っている私の傍で、邁も又物思いに耽っていた様だった。だが、覚悟を決めた様に口を開く。

「亜優にも言つてないみたいだけど、邁も人間学に興味がある……と思う。」

それを聞いた瞬間、頭に鈍い衝撃が走る。

もしかして、邁お兄様も私と同じ事を思つて……？

「邁は人間になりたいのか？」

その言い方は、私に聞いた……と言うより独り言の方だろう。その問いには答えず、私は邁に問う。

「邁お兄様と私……どちらが先に人間学に興味を持った？」

どちらが先に、人間に憧れた？という意味を含んで聞いた。

「亜優……だと思つ。」

割合あつさりと答えた邁。

ああ、そうか。

邁お兄様は気が付いたんだ。

私の興味に。人間に無い翼の色に。

「邁。人間界には、「翼がほしい」って言う曲があったらいい。私と邁お兄様は、翼なんか無かったら良いつて思つてるのにな。」
不思議。

人間も天使も、自分に無い物を欲しがる。

「亜優。それ、聞かれると不味いぞ。」

ここは使用人らしく、邁が私を注意する。

「邁が私の事亜優って呼んでるのも、聞かれたら不味いよ。」
今の私、意地悪だ。

嫌でも目に入る邁の翼の色が、切実に羨ましい所為だろう。

「ああ、そうだな。」

苦笑いしながら答えた邁に、

「ごめん。」

急いで謝る。

「別に構わない。」

邁がそう言ってくれるのを待ってただけだね。

「邁。遅お兄様に会いたい。」

そう言うと、

「分かった。すぐ呼んで来てやるよ。」

そう言って部屋を出て行った。

お兄様、お兄様も人間学に興味が御有りですか？心の中で、遅お兄様に言う言葉を繰り返す……。

コンコンツ。

邁……いや、野喜のノックの音がする。

「失礼致します。」

野喜が部屋に入ってきて来る。後ろには……遅お兄様。

「亜優。何か用か？」

入ってきてすぐに、お兄様が私に声を掛ける。

「いえ……。用と言う程の用は無いんですが……。」

私が口籠ると、

「そうか。」

お兄様が、優しく微笑む。

「いえっ、あの……。お兄様も人間学に興味が御有りですか？」

そう切り出すと、

「……。何故分かった？」

お兄様は、あまり驚く様子も無く聞いた。

「何故って……。」

又口籠る私に、

「野喜！お前だろ。」

お兄様は、後ろに控える野喜に聞いた。

その口調に怒りは籠められておらず、いたって冗談の様な口調だったが、

「……申し訳ございません。」

野喜は、静かに謝った。

「いや、別に……。」

遅お兄様も、軽く？受け流した。

「……本当に、2人の関係は変わったな。と思って眺めていると、

「じゃあ、俺はこれで……。」

と言うのが早いか、遅お兄様はさっさと部屋を出て行った。

「では私も……。失礼致しました、姫様。」

そう言うのと、何故か野喜までもが足早に去って行った。

何か、忘れていた様な気がする……。

ああー！お兄様、結局人間学の事聞かせてくれなかった！

まあ、又今度でいいか……。

その後何回か聞いたけど、その度にお兄様は上手く話しを流した。結局お兄様に人間学の事が聞けたのは「あの日」だった……。

第3話 柵（後書き）

第3話、読んで下さってありがとうございます。

タイトルですが、「柵」にしようか「翼をください?」にしようか迷ったんです。

でも、「翼をください?」だとぱくりみたいになっちゃうので、「柵」にしました。

最初のところは、タイトルを「柵」で纏める為の時間稼ぎ?ですね

（笑）

では……。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

これからもお付き合い頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3838z/>

Volare ala

2012年1月6日20時52分発行